

「マキってさ、ずっと紙煙草だよね」

そう言われて私は意識を隣に居た彼女に合わせた。彼女――高校より仲良くしている友人だ。別に彼女だけが仲良くしているわけじゃなく、今の集まりは高校の同窓会で、全員が仲良くしている集まりだと言えるだろう。

二十代後半ともなれば喫煙率は増えるけれど、電子煙草のメリットが多いからか、今は大半が電子煙草を利用していているようだ。確かに周囲を見るとこの電子煙草が良いよ、とかあの電子煙草はだめだ、とかまるで全員が電子煙草のメーカーの人間のような営業トークを交わしていた。

「ねえ。マキ、話聞ってる？」

「うん？ あ、ああ。聞ってるよ」

煙草をとんとんと叩いて灰を落とす。

「それにしてもさー、なんというか、肩身が狭くなった感じがしない？ ちゃんとかちとら喫煙席で吸ってるっていうのに、わざとらしく咳払いしたりして。寧ろ煙草税を加味してもこちらのほうが税金を多く払ってるんだっての」

「ま。言いたいことは分かるけれどね」

電子煙草が便利だしメリットが大きいのは分かる。

けれど、私はずっと紙の煙草しか吸わないし、吸うことはないだろう。

その理由を語るには、私の過去について語ることになるのだろうけれど――。



私の家族は、お世辞にも幸せな家庭とは言えなかった。父と母はいつも喧嘩ばかりしていたし掃除嫌いの両親のお陰で家はゴミ屋敷状態。そんなでもって両親が煙草を吸うものだから部屋にはやにがこびりついていて、というわけ。

けれど、そんな馬鹿らしい状況だからといって、格好良いと見せつけられるような場面ってのはあったんだよ。母親はパートでファミレスに勤めていてね、幼い頃は良くファミレスの裏方部屋まで一緒に行くこともあった。新メニューを一緒に食べさせて貰って、

子供目線で味をきかされたこともあったっけね。でも普通に考えてまだ年端もいかない少女にそんなことをきいたところで実際に参考になるかどうか定かじゃ無かったと思うけれど。

昔は喫煙者に対して厳しい時代じゃなかったから、そういう部屋には喫煙室がついているものでね。休憩時間であれば煙草を吸って良いようになっていたんだよ。勿論、ウエイトレスの服に臭いがつかないように消臭剤が置かれていて、外に出るときはそれを振りかけておく必要があるわけだけれど。

ま、いくら客商売とはいえど昔はそこまで厳しくなかった時代があったということだ。ガラス張りになっていた喫煙室から見る（流石に中に入るわけには行かなかった）母親の姿は、どこか格好良く見えた。

煙草を口づけ、白い息を吐く。その一連の流れが、どこか格好良く見えたのは、子供ながらの心だったのか、それとも――。

いずれにせよ、煙草という切っても切り離せない思い出がたくさん蘇るのが我が家であり、それは存外普通のことだったのかもしれない。



「ただいま」

父親は厳しかった。家に帰るのはいつも日付が変わる少し前で、家を出るのは日が昇る前だった。その頃は何も思わなかったけれど、今思えばブラック企業に勤めていたのだらう。

父親も喫煙者だった。家に帰ると肌着に着替えて一服するのが日課になっていた。酒もギャンブルもしなかった父親の唯一の嗜好が煙草だったといえるだろう。

灰皿は常に吸い殻が山盛りになっていて、お世辞にも綺麗とは言えなかった。けれどそれは日常だったから、他の人に指摘されるまでそれが非日常であるということ知らされたのだった。

両親はヘビースモーカーだったけれど、意外にも私に喫煙を勧めることはなかった。親もそれぞれ自分から吸ったというわけじゃなくて誰かに勧められて試したとか言っていたけれど、吸う・吸わないの意志を示すのは自分自身だと言っていた――とどのつまり、最後に決めるのは自分だからそこは細かいところを考える必要は無い、とのことらしい。正直色々と最悪な親だったが、そこに関しては素晴らしい考えだと思う。

父親の煙草の匂いと母親のそれは違っていて、幼いながらも煙草の違いに気付いていた。

「煙草買ってきて」

その言葉に私は了承して近所のコンビニに買いに行くこともあった。

当時はあまり厳しくなかったということもあって、『いつも煙草を買いに来ている親の子供』ぐらいにしか思っていなかったのだと思う。だから普通にお金を出していつもの煙草を出してくれた。まあ、勿論今は年齢確認があるからそんなことは出来やしないのだけ
れど。

「お使いだなんて、立派だねえ」

そんなことを言って、個人経営のコンビニのお婆ちゃんはいつもお菓子をくれたっけ。勿論、十円程度の駄菓子だけど当時の私はそれでも平気で喜べちゃうくらいには子供だったのだ。

家に帰って、煙草とお釣りを渡して、私はお菓子を頬張る。苛立っていた両親も煙草を吸うと、落ち着くようで、みるみるうちにいつもの様子に戻っていった。

その頃の私は、煙草が無い両親が一番恐ろしい存在だと思っていた。

だから、煙草が無いと何となく察することが出来るようになったし、そのときの両親はなるべく触れないようにしようと思えることが出来た、というわけだ。実際にその結果私にも飛び火がかかったことだって良くあるし、それで両親が喧嘩をしたこと

もあつたわけだし。

ま。子供ながらに煙草の恐ろしさを知ったけれど、それと同時に煙草を吸う大人に優越感も持っていた。ジェラシーとでも言えば良いのだろうか。そんな感じだ。

高校を卒業し、就職した私は先輩からの煙草の誘いを二年間——正確に言えば二十歳になるまでずっと断つてきていた。みんなやっているから、一本だけで良いから、という甘言はすべて受け入れなかった。両親のこともあつたけれど、そもそも法律に違反していることだし、間違っていることは間違っているとはつきり言ってしまう性格だったからかもしれない。猪年は猪突猛進型だからね、とよく家族に言われていたのも見破られていたからかも。

二十歳を過ぎて、いつしか私も煙草を吸うようになった。最初の一口目は未だに忘れられない。口の中に広がる煙たさに思わず咽せてしまう程だった。周囲に見ていた両親が苦笑いしながら、無理しなくても良いのに、と言っていたけれど、私はそれでも諦観するとは無かった。

一口目の煙草はどこかほろ苦く、そして甘い香りがした。煙が脳を満たす感じがして、高揚感すら感じられた。

「……嫌なら無理しなくても良いのに」

母親はまたそう言ってくれたけれど、私はそれを制した。

煙草を吸えるようになるということ。それは私にとっては一つの大人の指標だと思って
いたから。そしてそれをクリアしたということは、私は大人に近づいたということになる。

大人になるという指標は人それぞれだろうけれど、私はその一つに煙草を吸えることを
加えていた。きつとそれを言うかどうか、なんて言われるだろうけれど、きつとそれは笑っ
ちゃうくらい下らない理由なんだ、としか言わないし言うことはな
い。